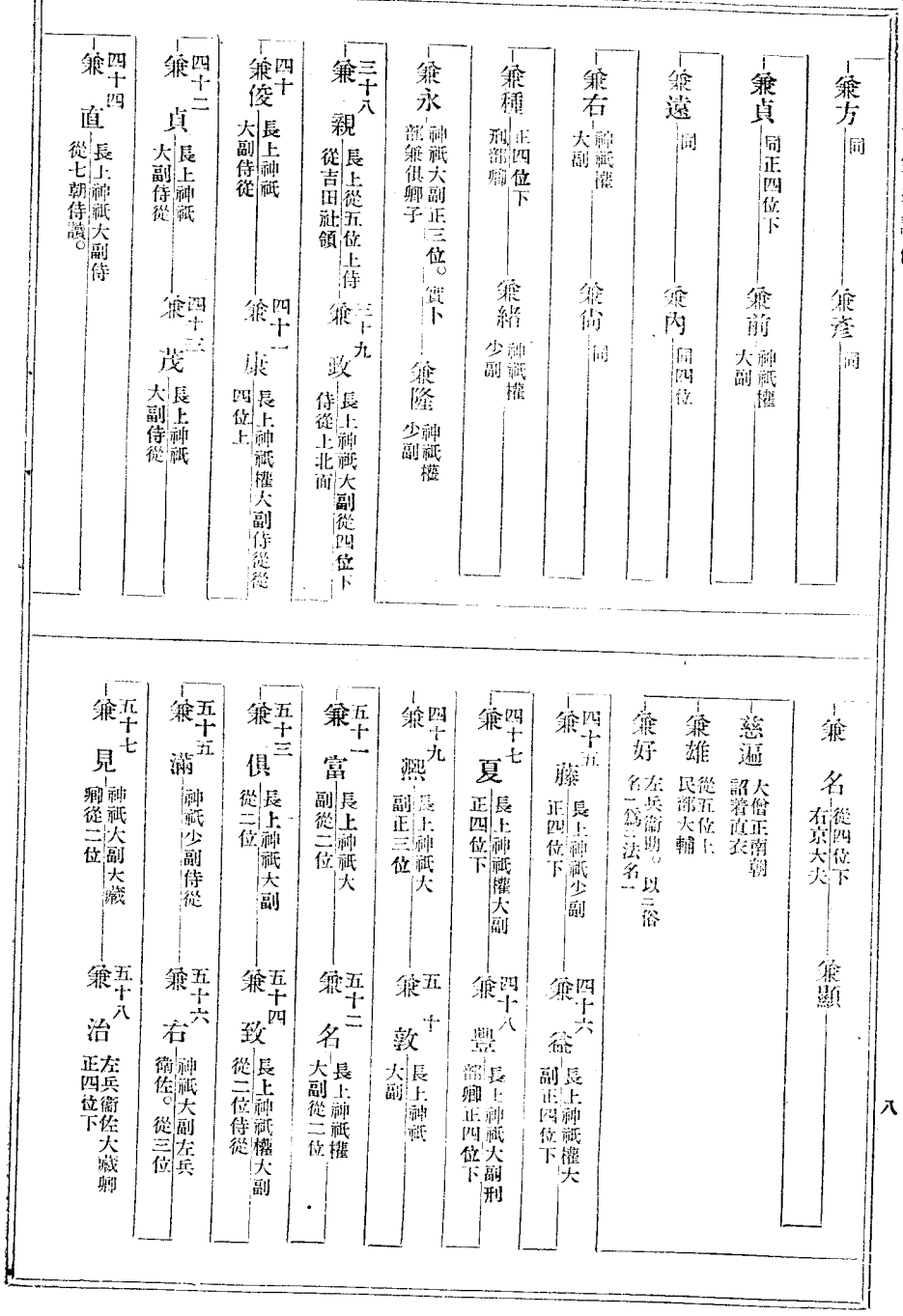
平田篤胤全集

2

文學博士 井上賴圀
熱田宮々司 角田忠行 監修
平田盛胤
三木五百枝 校訂

東京 一致堂書店



伊勢物語梓弓

むかし。をとこ。うひかうぶりして。奈良の京春日の里に。しるよしして。かりにいにけり。

むかしとは。たゞに過にしかたをひろくいへるにて。文の發端を。かやうに書出すことは。からやまとの書におほかることにて。尚書といふ漢籍の序にも。右者伏羲氏王二天下一也。とかき出たるなどこれなり。（以上、臆斷によりていへり。）むかしといふにて。しばしよみ切るやうによむべし。といふ說あり。古意にいはく。此說よろし。○男とは。業平みづからの事にて。わざとむかしの。或男といひなされたるなり。さるは此ふみよ。大かたは。男女のみそか事の多く。ことにその世にしては。憚るべき事のおほかれば。（二條の后との事、また伊勢の齋內親王を姧せしことのたぐひ、）この頃の人の。たゞありにて。男女のかたらひせし事などは。さらにつゝむ事なかりし心にも。（此ころの人々の、みそかごとをつゝまざりしこと、總論にいへり、）しかすがに。つゝましう思はれし故にぞあらん。○うひかうぶりとは。初冠にて。童のはじめて。冠きることをいひて。則元服の事なり。（伊勢貞丈のいはく、古代の人は、みなさかいさを剃ることなくして、總髮なり、童子も中剃することなく、髻を結て、うしろへ長く垂ておきたり、髮の先をば、肩の下邊にて切るもあり、また婦人のごとく、さげ髮にしたるもあり、その父の好みによりてふたやうなり、さて元服の時は、髻を手一束半ばかりおきて、先をきり、冠をきするなり、元はかうべなり、初めて首に、冠をぼしをかぶる故、元服といふ、服は身に附ることをいふなり、）古き抄に。日本紀の孝德天皇の御卷に。初位をうひかうぶりとよみ。またこゝに。しるよしして。とあるをもて。叙爵の事なりといへるはひがことなり。又うひを。よのつねに。うるとかけるは。假名たがへ。萬葉集に。宇比とかき。また古今集物名の歌に。貫之の。そうびをかくして。我はけさうひにぞ見つる。とよまれたる。これうひとかくべき證なり。（以上本文、臆斷古意によれり。）○奈良の京は。大和國にて。元明天皇の御代より。

桓武天皇の御代まで。七御代の間。宮しきませる所なること。誰もしれるがごとし。京の字を。眞名本に。花洛。長安。京師などかけるをもて。古意にいはれしは。故はみやことよみけんかし。京の字。音にとなへば。しかは書じ。といはれたり。理はさることながら。こは中むかしより。字音のとなへ多くなりて。かへりて古言よりは。みやびたることに。いひなれたりと見えて。はやくよりしかよみ來り。すでに眞名本にも。文字をば。花洛。京師など書つゝ。よみをば。きやうとつけたるなどをもて思ふに。こはよみ來れるまゝに。字音によむべきにや。春日の里は。添上郡にて。ならのみやこの近きわたり也。〇しるよしとは。萬葉集に。領の字を。しるとよみたれば。領縁にて。則知行所といふにおなじ。下に。津の國うばらの郡。あしやの里に。しるよしゝて。いきて住けり。ともかけり。(以上、臆斷、古意によりていへり、)いとも上つ代は。しばらく置ていはず。藤原。奈良の朝のほどより。今の京のはじめつかたまでは。官位高き人の。封戸切封などのほかに。所領の事はあらぬ制と見ゆるを。業平は。父は阿保親王にましませば。そのほどより。領傳られしにやあらん。(以上、古意によりていへり、)また按ふに。知顯抄に。業平母。伊豆内親王の御領に有ける所を。我所がほに下りければ。まさしき我所持ならず。と云ふ心にて。しるよしの言葉をつかへる也。といへる。もし此説の如くならば。母内親王の領給ふ所なり。(但ししるよしを、まさしき我所持ならず、と云ふ心にて、しるよしの言ばをつかへり、といふことはうけがたし、さるはしるよしといふこと、此所には此説のごとくにても、あふやうなれど、下に、あしやの里にしるよしゝて、いきて住けり、とあるには、さらにあはねばなり、されば、伊豆内親王の領所なり、といふ説をのみ、とらばとるべし、しるよしの説はとるべからず、猶よく考ふべきことなり、)〇かりに往けりは。鷹狩にゆかれしなり。古書には。往の字去字などを。いぬるとよめり。俗には來るものゝ。歸るにのみいひなれたれど。只ゆくをいぬるといふ也。或説に。かりにいぬとは。假初にゆけるなり。といふ説の

あれど。文に。しのぶずりの狩衣を着たる。ともあれば。鷹狩なることとしるし。さてまた元服して。やがてゆきたるにはあらず。業平の。一生のことをしる者故に。まづうひかうぶりしてとは。書出したるなり。狩にゆかれしは。いつにてもあるべし。(以上、臆斷によりていへり、)

その里に。いとなまめいたる女。はらからすみけり。このをとこ。かいまみてけり。

その里とは。春日の里なり。〇いとなまめいたるとは。いとは古書に。最字また甚字などをよみて。則この字どもの義なり。なまめくは。その言のもとをとかんには。中々ちまたに迷ふべければ。今は。こゝの文にかなへるをのみいふべし。遊仙窟に。婀娜をかくよみたれば。媚ありて。うるはしき心にて。こゝによくかなへり。されば甚もうつくしい女。といふことなり。(以上、臆斷によりて、いさゝかおのが心をも加ふ、)〇はらからとは。共腹の義にて。いと上つ世には。同服の兄弟姉妹をのみいひて。母のかはれるをば。ことはら(異腹なり、)といへりしが。このころには。すでにさるわかちをいはで。同服異服。なべて兄弟といへれば。こゝはたゞ姉妹ふたりすみてありし。といふ事なり。(以上、臆斷、古意によりていふ、)さてこゝに。はらからとかけるにても。業平の自記にして。實事なることの。一つの證なり。さるは。源氏などの如く。みなから作りたる物語ならましかば。こゝにはらからといへるなどは。何の用とかする。すべて作りものがたりは。その文にやうなき人などは。かきいでざることなるをや。此物語は。それとことにして。その時實に。姉妹の女すみてありし故。その時のありのまゝを。書おかれしなり。或人のもたる異本に。女はら住けりとあり。そのもたる人。これをよしとして。こは若殿ばらなどいへる例にて。ことわりにかなへり。この段〻はらからにやうなきをいかでいはん。こはからの二もし。衍なりといへれど。これも此ものがたりを。ひたぶるの作りものがたりのなみに。思ひなせるにて。あやまりなり。やうなしとて。實のことなれば。姉妹すみたらんには。いかでかくしるさゞらん。ことにこゝは。女ばら。などいふべき文の

いきほひにあらぬをやっ。○此男とは。業平朝臣なり。○かいまみとは。垣間見にて。物のひまよりうつり見ることなれど。轉りては。物のひまよりならでも。ひそかにうかゞひ見るをば。すべてかいまみるといへり。竹取物語に。やみの夜にも。みなかしこよりのぞき。かいまみまどひあへりといひ。大和物語に。久しくいかざりければ。つゝましくたてりけり。さてかいまめば。といへるなど。なほかれこれの書どもに。多く見えたり。(以上、臆斷、古意によりていふ。)

おもほえず。ふる里に。いとはしたなくてありければ。こゝちまどひにけり。

おもほえずは。思ひがけぬなり。(臆斷、)○ふる里とは。則春日の里のことにて。桓武天皇の御代に。都を今の京へうつし給ひて後は。奈良の京は。ふる郷となりて。此等業平の。いくつになられしほどかはしられねども。二十四五歳の時としても。遷都よりこのかた。五十年に近ければ。いかにも大かたはあれて。古里といふさまにぞありけん。○いとはしたなくてとは。いとは最字甚字などの意なる事。すでに云り。はしたなくのなくは。辭の字にて有無の無にあらず。大氣なるをおほけなくといひ。荒きをあらけなく。と云ふが如し。(篤胤云、知顯抄に、はしたなしとは、たらぬ事もなく、よき事也、何も不足にたらぬをば、はしたと云、されば此女、年わかく、姿やさしく、みめすぐれて、いろめきなさけばみたれば、不足なしといふ意にて、はしたなきとはいふ也、といへるは、これもなきを、無の字の意と思へるにて、ひがことなり、また古意には、はしたなきは、端方なきといふ語をはぶけるにて、いはんにもはしなく、せんにもはしなきにて、俗に手足も出されず、といふにおなじ、古書に、無端とかき、眞名本に、間無とあるは、意相かよへり、或說ともは、みな誤れりと云れしもいかゞあらん、)竹取物語に。みこは。立もはしたに。居るもはしたにて居たまへり。日のくれぬれば。すべり出給ひぬ。此はしたにて。といふにおなじ。つくかたなき心なり。元眞集に。

我宿に植てだに見む女郎花。ひとはしたなる秋の野よりは。」此ひとはしたなる。とよめるにて心

得べし。空穗物語に。いとはしたなき心をなして。あすら(阿修羅なり、)の中にまじりぬ。(なほ古書を多くあげて、證とせるを、今は其の要をのみあぐるなり、)これら。はしたも。はしたなきも。おなじ心なり。(以上臆斷、)○心ちまどひにけりとは。かくあれたる故郷には。すむべきさまにもあらぬ。うるはしきなまめいたる女の。わびしくおちつかぬやうにてあるを。かつはあはれぶ心に。いとゞ心ちのまどはれしなり。(以上、臆斷によりて云ふ、)

男。きたりける狩衣のすそをきりて。歌を書てやる。

その男。しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける。よのつねの本に。男のとあり。鈴屋翁のいはく。こは眞名本に。男の。のもじなきぞよろしき。男のとては。云々して歌をかきてやること。女のしわざになるなり。といはれたる。眞にさることなり。今はその說にしたがひて。のもじをはぶきつ。○狩衣は。伊勢貞丈の考に。古は狩襖とも。また布衣ともいへり。和名抄に。布衣。此間云褐衣。加利岐沼とあり。延喜式の彈正式に。裁絹絁爲獵衣ことを。禁斷せらるゝこと見えたり。これ布にて制るべき物なる故。絹絁を裁て。獵衣とすることを禁斷せらるゝなり。狩衣は。もとは鷹飼の服なり。鷹狩の時。袖をくゝりて。手さしたる如くにして。鷹をつかふなり。嵯峨天皇。宇多天皇などはなほだ鷹狩をこのませ給ひて。御みづから。御鷹を合させ給ひけるよし。嵯峨野物語に見えたり。されば公卿殿上人も。手づから鷹を合されしほどに。官位高き人のき給ふことなれば。布をば用ひずして。唐綾文紗などの狩衣を用ひられしなれば。狩衣の品も花麗になりて。鷹狩ならぬときも。たよりよき服なれば。いつしか常の時にも。着することゝなりし也。(こは秋草に見えたり、なほ委くは本書を見るべし、)といはれたり。此考によれば。古はもはら狩に用ひたる衣なり。さるから業平もこのをり狩衣をきて出られたる也。(頭書云銕云此邊前後也)○狩衣のすそを裁て。歌を書てやるとは。則その切たるすそへ。歌を書てやられしか。又は歌にそへて遣すにてもあるべし。(臆斷、)こは此歌の。よせたる心をしめすなり。古は。其歌によせある草木の枝につけ。或は何ものにも書て。

歌の餘情をなしつ。（古意○またおなじふみ頭書に云く、）

或説に。時に花の枝もなければ。衣のすそを切て書たる。といふはいとわろし。何の枝は有とも。此歌には。しのぶすりならでは由なし。（仍て記者の。かく思ひよりて書たるそ。風流なる物をや。）されば。源氏のあふひの巻に。扇のつまを折て書し事あり。又承保の比。殿上人。舟岡の邊の櫻を見にまかりたるを。齋院より。糸のもとにはくる人もなし。といふ歌の末を書て。柳の枝に附ておくられしを。雅通といふ人。直衣のすそを切て。かへし歌書てやりしは。こゝをまねびたるものなり。其時櫻は有しを。かく衣のすそを切て。書るを思ふべし。此事は。古今著聞集に有て。後の物ながら。事はふるき時の事なり。

○しのぶずりとは。鈴屋翁云。こは古今集の河原左大臣の歌の。顯昭の注に。陸奥國の信夫郡に。もぢずりとて。髪を亂したるやうにすりたるを。しのぶずりといふといひ。契沖が勢語臆斷にも。信夫郡より。むかし摺て出したる名物なり。といへるが如し云々。（以上、玉かつまの説、）といはれたるか如し。さて又萬葉の歌にまたら衣をすらんとて。ともよみたれば。いと上つ世には。物の色を斑文に（頭書云古には衣を木草の花或は葉もて）摺つけたるのみなりけん。と思はるゝを。延喜式の頃に至りては。若草摺。小松摺。遠山すりなどの名。さま〴〵見ゆるを思ふに。今の京の始つかたより。巧みに物の形をする如くなりけんかし。さて摺衣は。御狩。或は歌垣等。其外にも着たりし事。男女にかぎらずといへども。私には着ることなかりしにや。延喜式の弾正式に。凡摺染成之衣袴者。並不得着用。但縁公事所着。並婦女衣裙不在禁限。と見えたり。しかはあれど。旅などには。男も私に着しとおぼしければ。こゝに業平朝臣の。きて狩に出られたるも私なるべし。また源氏關屋の巻に。源氏の君の。石山詣の陪從の出立を。關山より。さとくづれ出たる旅すがたどもの。色々のあをの。つぎ〳〵しきぬひ物。くゝりぞめのさまも。さるかたにをかしう見ゆ。とかけるは。紫式部がころは。もはや式の定めのやゝくづれて。摺衣をも。誰しの男も着たりしこととしるし。（以上、古意にしたがつて云ふ、）

「春日野のわかむらさきの摺ころも。しのぶのみだれかぎりしられず。

かすがの里の女なれば。やがてその野の紫ぐさにたとへて。自きたる狩衣も。折ふし紫にすりたるなれば。やがて若紫のすり衣。とつゞけ。しのぶ摺のしのぶといふことを。その女を。わが思ぶよしにとりなし。亂れすりたる紋の。數しらぬによせて。我戀の亂れにたとへ。しのぶの亂れ。かぎりしられずとはよめるなり。（以上、臆斷、古意によりて云ひ、少しく己が心をも加ふ、以下臆斷、）宇多法皇。春日社にまうて給ふ時。大和守忠房が。よみて奉れる。三十首の歌の中に。

今年よりにほひ初なる春日野の。若紫に手なれぞも。紫に手もこそふれ春日野の。野守よ人に若なつますな。

顯輔

昨日見し信夫の亂れ誰ならん。心の內そ限りしられぬ。（頭書云こは何に見えたるにか）

となんおひつぎていひやりける。（ついておもしろきことゞもや思ひけん。

臆斷に。おひつきてとは。俗に只今まねらんと云こゝろを。追付まねらむと云如く。やがての心なり。伊勢集に。奈良坂のわたりにて。おひつきておこせたりける。と云るにはかはるべし。（篤胤云、伊勢集なるおひつきては、追及てと同じ意なるべし、）或注に。人におひつきなとしたるとは心得べからず。彼女のゆきたる所を。したひ尋て遣す心なり。といへるは非説なり。姉妹すみけるを。かいまみてけりと云るものを。いかで彼女の行たる所を尋て。遣したるといふことを得ん。また或抄にも。なんは上につけて。おひつきてといふより。河原左大臣の歌を。女の返事に遣す。其言ば書なる心にいへりと。これ又ひが説なり。左大臣の歌は。返しにあらず。ついておもしろきことゞもや思ひけん。信夫摺に。春日野のわかむらさき。とよみかけたる業平朝臣の心を。作者（篤胤云、この在五中將の集を、かく物語にかきなしたる人をい

ふなり、）のおしはかりて。事の次よく。おもしろき事どもや思はれけん。といへるなり。（以上臆斷）といはれしはさることなり。但し。（篤胤云、おひつぎてを、やがての心なりといへるはかなへれど、俗に只今まゐらんといふ心を、追付まいらんといふ如く、と云りしはいかゞあらん、おひつぎては、追續てにて、則やがての心なるべし、さればきをにごりてよむべきにや、）また古意には、眞名本にとなん云りける、とあるをとりて、となんおひつぎていひやりける、とある本を、理りなき事なりといはれたれと、よくよみ味ふに、今本の方ぞ、理にざりける、〇ついておもしろき事ども。と云るより下は。この集を。かく物語ぶみにかきなしたる。後の人のつけそへたるなり。今は「　」の印して。これをわかちぬ。下の條々。みなこれにならふべし。

みちのくの信夫もぢずり誰故に。みだれそめにし我ならなくに。

是は。古今集戀四題しらずにて。河原左大臣の歌なり。もぢ摺は。戻摺にて。亂りすれるをいへり。（知顯抄に、もぢずりとは、もちといふ、うすくあはらにおりたる布に、摺たるなりといへり、是も一說なれど、もちりすりのかたや、おたやかならん、篤胤云此歌にては、みちのくのしのふもちすり、といへるまては、亂たといはんりやうに、いひてたるのみなり、）〇さて歌の心は。たれ故に。亂そめし我にはあらず。君故にこそ。亂そめたれ。といふ心なり。是はしのぶのみたれ。かきりしられずとよめるは。此歌の心なんめりと。作者の。本歌に引て註するなり。下に紫の色こき時は。と云ふ歌の後に。武藏野の心なるべし。と注したるに同し。さて上にもいへる如く。此歌を。女の反歌とみては。亂そめにし。と句をきりても。我ならなくに。の詞かなはず。いかにとならば。我ならなくには。我にあらなくにと云を。つゞめたる詞にて。我ならぬにと云に同じければ。君が思ひ亂れたるは。我故には有まじきに。といふ心とはならず。定家卿の勘物にもかくありしなり。（以上、臆斷によりて、まゝ己か心をも加へたり、）〇さて又此歌。古今集には。亂れそめにしを。みだれんと思ふと有て。詞は少しのたかひなれど。心大にかはれり。古今集にての心は。いかなる誰ゆゑにも。いまさらに。心を變ずべきわれにはあらず。と云心なり。みだるとは。變ずるをいへり。萬葉第十四東歌に。

伊豆の浦に立しらなみのありつゝも。つきなん物を亂れしめゝや。」此亂れしめゝやは。東の事は。五音通にして。亂れそめゝやなり。是と同し。（以上臆斷、）〇論に云。定家卿云。河原左大臣源融。寛平七年八月薨。七十三。於在中將非幾先達如。といはれたるは。こは定家卿も。こゝの文に。融公の歌を。業平朝臣の本歌として。よまれたるやうに云るを。不審して註し給へる物なり。（篤胤云、古意にいはく、融公と、なり平朝臣とは、同時の人なるを、其みちのくのといふ歌を。本意とせしことおぼつかなしと、定家卿の書れたる、此疑を、深く思ひ定られたらましかば、此物語の旨をも得らるべきを、その頃は、世の亂つゞきて、古書を考る人なき時なりけり、といはれしはさることにて、是に始ぬことながら、この頃の人々、歌にはあやしうすぐれられたれど、學のすぢには、ゆきとゞかぬことのみ多く、この物語の云々、）又彼卿の歌に

春日野のかすみのころもはる風に。信夫もぢずり亂てぞゆく。」是また本意は。業平朝臣の。こゝなる歌をとりて。もちずりは。融公の歌の詞を。とりそへられたるも。右の心なるべし。又袖中抄の。第十八の卷にも。八つはしのくもで。といふ歌の注に。定家卿のいはれしと。同したぐひの說あり。（以上、臆斷によりていへり、）縣居翁の云く。融公と云々。

むかしひとは。かくいちはやき。みやびをなんしける。」

いちはやきは。心あまたありて。古にはいきほひ疾く。たゝはしきことをいへるを。此書の頃に至りては。さとく甚しき事にも。轉しいへり。今發に云るは。甚しき心なり。蜻蛉日記に。打ねたるほどに。かどいちはやくたゝく。又蟬の聲。いちはやうなきたれば。おどろきて。などいへる是なり。（以上、古意、臆斷によりていふ、）〇みやびは

宮風にて。都の手ぶりをはじめ。何にても。風流なる事を云ふなり。いやしげなる事を。鄙風里風などいふを。むかへてしるべし。さて夫利の約めは。備なれば。延ては宮ぶり。約めてはみやびと云也。さてこゝにては。俄なる事に。かゝる歌よみて。やがておくりたるなど。いとさどき。風流なるとりなしよと。記者のほめたることばなり。むかし人は。といへる中に。いまのおとれるこゝろこもれり。下にむかしひとは。かくすける物おもひをなんしける。いまの翁まさに爲なんや。といへるは。くらべていひあらはせり。(以上、臆斷古意、)

むかし男ありけり。奈良の京はなれ。この京は。

花落マ

人の家まださだまらざりけるときに。西の京に女ありけり。

長安マ

桓武天皇の延暦三年に。奈良の京より。山城國の長岡にうつらせ給ひ。おなじ十三年に。長岡より今の京にうつらせ給へり。この京とは。則今の京の事なり。○人の家で。まださだまらざりけるときとは。都をうつされて。ほどなき事故。人の家居も。たゞ此記者の。わざと時世をたがへて。業平朝臣の歌を。全く出しても。業平朝臣ならぬやうに。なせるものなり。故に年月のさだかなる遷都をいひ。かつ遷都有て。ほどなき時と見せんとて。人の家またさだまらざりし時。などゝ書たり。此條一つにても。この文の心は知べし。かくその本をおし極めて。事の實を知て後に。その文をとくべし。さることをばいひかくし。又云ひまぎらはして。とかんとすれば。一つもあたる事わりはなし。といはれたり。これ眞に理ある論ひどもにて。

○さて又。いまひとたび。思ひ直して考る旨有。さるは古意に。その頃の皇朝の御いきほひにましませば。五六年の間には。東西の京の家居なりぬべし。といはれたれど。當時の事は。今よりは。しりがたき故よしなどのあゝて。實に此所にしるされたる如く。業平朝臣のわかゝりしほどまで。はか〳〵しく。家居の立つゞかざりし故。業平朝臣のその時のまゝに。かくしるしおかれたるも知べからず。知顯抄に。文徳天皇の御時。冬嗣の大臣。閑院殿をつくりて。帝に奉りしより。東の京さかへ。人の家居もしきりにたつ。といへるも。妄説とはきこえず。〔頭書云みたりに云る事とは□□なればより所のありけんかし〕ふるめかしく。何とやらんよしありげなり。さればこの條の。うちあはぬやうに思はるゝ事も。今よりして。あながちにいひやぶるべきことにはあらずなん。いかさまにも。こは業平朝臣の書れし後の。つくりそへたる人の。おしはかりに。これらの言を加へたるにや。古意には。記者のわざと。時世をたがへて。かくうちあはぬやうに。書なせるなり。と云れたれと。こはあながちに。此書をみながら。業平朝臣のかけるにはあらす。といふ説をおしたてんとて云るゝにて。強説なり。みながら後の人の作たるにはあらぬ事は。こゝなるおきもせずの歌。古今集に出て。其の言書に。やよひのついたちばかり。しのびに。人に物らいひて後に。雨のそぼふりけるに。よみてつかはしける。とありて。こはこの物語の。いまた人のさかしらのまじらぬほどにと

りて。撰者たちのてんさくして。あげられたるなるべければなり。さればこの條のうちあはぬ事どもは。さかしらせし人の。時世のうちあはぬ事までを。こまかに思はざりし誤にぞあるべき。此書すべてをよみわたすに。さる誤多く見えたり。（其次々に云べし、）

その女。世の人にはまされりけり。その人。かたちよりは。心なんまさりたりける。ひりとのみにもあらざりけらし。

世の人にはまさるとは。その容貌の人にすぐれてうるはしきとなり。或抄に。種姓をいふとせるはわろし。その容貌の。人にすくれたるのみならず。心ばせは。かたちのうるはしきよりは。なほまさりて。やさしかりしといふ事を。かく言をかさねて。ほむるなるべし。かくかたちと心の。やさしかりしといへば。種姓はその中にあるをや。（以上、臆斷によりていへり、）〇ひとりのみにもあらざりけらしとは。夫ありし人といふ事なり。ひとりのみにはあらざりける。とたしかにいはで。あらざりけらしと。よくしらぬさまにいふが。一つの文法也。（臆斷に依ていふ、）〇さて古意に云れしは。眞名本に。獨耳にもとかけるを思ふに。此女。外にも思ふ男のありて。心のまさりたるとは。好色心なる反をいへるならん。そは此男を。まめ男と。打返していへると。おなじ心ばへなり。といはれたる說なり。たとへばうつ蟬の君の。まことを徹す心にはあらで。藤壺の后の。姿情たぐひなきものから。源氏の君のしひ言には堪ずして。なびくが如きをいふか。といはれたるぞかなへる。

それを彼まめ男。うち物かたらひて。

それをとは。その女をなり。「こはかの獨のみにもあらぬにあたれる語なり」〇まめ男とは。眞名本に。實男とかき。日本紀には。忠誠の二字をまめとよみ。また古今集の序にも。色このみにむかへて。まめなる所には。といへるなどをもて。心の實なる人をいふなる事をしるべし。さて業平朝臣は。いみじき色このみにて。ぬしある女をも。奸けなどせる事の限りなきを。中々に實男といふは自ざれてかくいはれしにて。こは今の俗にも。多くあることにて。つねに酔ひくつがへる人の。み

づから此下戸がなどいひ。また腹あしき人を。かの心よしよ。など云ふとおなじ心ばへなり。これにて實ならぬ人の。みづからまめ男。と「いひ獨のみにもあらで。好色心なる女を。心なんまされりける。と」いへる心をさとりねかし。（以上、古意によつて、少しく己が心をも加ふ、）〇うち物かたらひてとは。語相てといふことなれば。男の。思ふよしをいひはるかして。かたみにつゝみなく。かたらひたるとの事なるべし。

かへり來て。いかゝ思ひけん。時は彌生のついたち。雨そぼふるにやりける。

いかゞ思ひけん。とのみいひて。その心をあらはさねば。實の心しるべからず。といへども。文のさまと歌によりて。こゝろみに。その本情をあらはしいはゞ。容貌といひ。心まで人にまされる女の。ぬしさへあるに。からうじてかたらひはしけれど。かにかくに。かの女の夫ある事などの。心よからで。くるしく思へりしにぞあらん。〇そぼふるとは。今の俗にも。そぼ〳〵ふる。しぼ〳〵ふる。などいふとおなじ。（此外の說ども、すべてとるにたらず、添ふる也といひ。壯降にて、さかんにふるなりなどいふは、すべていふにもたらず、）萬葉集十六の卷に。

いやひこのおのれ神さび。青雲の。たなびく日すらこさめそぼふる。」此こさめそぼふると云にて知べし。また新古今集に。重之歌に。

春雨のそぼふる雲のせやみせず。落る涙に花ぞちりける。」是も細雨の。さすがにやまぬにて。感はあるなり。（臆斷の說、）〇古今集に。此歌の詞書に云。やよひのついたちより。しのびに人に物をいひて後に。雨のそぼふりけるに。よみて遣しける。とあり。是はこゝの文とたがへり。（篤胤云、こは撰者たちの、こゝの文を、あまりに省略にすぎて、心さへかはる計りになれるか、または古今集なるが、業平朝臣の、かきおかれしまゝに正しくて、こゝの心もまたなるが、のちの世人の、さかしらなるにや、）物をいひてとは。逢て語にはあらず。いひいてそむる心なり。（篤胤云、いひいてそむる心にはあるまじ、ついたちよりといへるにて、逢て語らへるなる事しるさをや、）また八帖に

は。後の朝の歌とす。然れ共歌のやう。後朝の歌にはあらず。爰に書るやうも。歸り來ていかゞ思ひけんとは。二月晦日の夜あひて。朔日の暮に遣すか。また日をへての心か。此詞の心を得るやうに随て。歌の心もかはるなり。(以上、臆斷、)

起もせずねもせで夜をあかしては。春のものとてながめくらしつ。

古今集戀三。日をへて後遣はす心ならば。人を思ひてぬるともなく。おくるともなくて。よるはなげきあかし。ひるはまた春の物とて。つく〴〵とうちながめて。長き日を暮しかぬる。といへるなり。詠に長雨をかねたり。また歸り來て。其日の暮などに。遣はす心ならば。諸ともに。こしかたの心つくしをかたり。ゆく末を契りなどして。はかなき短夜は。おくともなく。ぬるともなしに。あけて歸りきて。なかき日の。雨さへそぼふるに。ひとりながめて。くらしわぶる。といへる心也。歸りきてといへるは。其日よみておくれるやうなれど。猶上句の心は。後日に遣はせるにや。からぶみ毛詩に云。寤寐思服。悠哉悠哉。輾轉反側。まれいはく。言念君子。載寢載興。謙德公集に。「よるはさめひるは詠めに暮されて。春のこのめぞいとなかりける。六帖に。「ふして思ひおきてながむる春雨に。はなのした紐いかゞとくらん。千載集春に。「つれ〴〵とふるは涙の雨なるを。春の物とや人のみるらん此等の歌を合せて見るべし。

むかし。をとこありけり。けさうじける女の許に。ひじき藻といふものをやるとて。

けさうは。繋相。繋念。繋心など云語。佛家の書に見えたり。萬葉集に。係念と云字もあれば。繋想の字音にて。こゝは男の。心を繋たる女を云なり。(以上古意、)〇ひじきもは。和名抄に。鹿尾菜。辨色立成云。六味菜。(比須木毛、)とあるこれなり。こは今の世にも。調じて食ふ藻にて。すなはち今も。ひじきと云ふなり。和名抄に。ひすきもとあれば。すとじ相通ふ音にて。古くはひずき。ともいへるにや。(以上、臆斷によりて、いさゝか己が心をも加ふ、〇古意にも、このひじき藻の說をとりて、さていはれしは、眞名本に、是を裀裳と書り、一本に、裀と有も、ともに誤にて、毯の字なるべし、和名抄坐臥の部に、毯は毛席、以五色絲爲之と見え、賦役令にも、毛して織たる物を、貢まつるとあれば、皇御國にも、いにしへは、さる物を用ひたり、萬葉集に、しきもあふ者ともよみ、又竹取の翁の歌に、しきもなす、しきにとりしきともありて、臥具をしきもと云に依ば、もしくはさる敷毯をおくりしにや、とおぼえつるを、猶しかにはあらじ、との說にしたがふべし、といはれたる、いかにもかゝる物をおくらん事、雅風たるわざともおぼえず、眞名本に、裀裳とあるなどは、例のたはふれ書なれば、いふにもたらず、同くれと、文字の誤なんど考て、ものせられしも、さらにやくなきわざなるをや、)〇扨ひじきもをおくれる事は。歌の詞をまうけん料にて。萬葉集四の卷に。高安王の。褁鮒を。娘子におくりて。云々とよまれし類なり。ひじきものには。とそくむ料におくられしなるべし。(以上、臆斷によりていへり、)

おもひあらばむぐらの宿にねもしなん。ひじきものには袖をしつゝも。

おもひあらばといふ事。例の業平朝臣の。心あまりて。言はたらぬいひざまなれど。かばかりたえがたきおもひあらば。玉のうてなもかひなし。むぐら生たる宿に。敷物なくて。袖をひき敷物にしても。諸ともに諸ともにこそねめ、と詠るならん萬葉集十一に。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・此等の歌を合せて見るべし。

「二條の后の。まだみかどにもつかうまつりたまはで。たゞ人にておはしましける時の事とぞ。」(世のつねの本に。時の事なりとあり、今は眞名本に、與趾とあるによれり、)

これも後の人の書加へたるにて。こゝにひじきもにそへて。しか〴〵と歌よみておくりたる。女とは。二條后の。また凡人にて居給へるほどの事なりし。ときゝつたへたりしまゝに。しるせるもの也。二條后と申は。御名を高子とまをして。

長良卿の御娘にて。御年・・・のとき。淸和天皇の后にたゝせ給へり。業平朝臣とかたらひ給ひしは。こゝにいへる如く。凡人にて居給へるときの事なり。さて此次々に見えたる如く。此后と。業平朝臣とは。としひさしくかたらひけると思はれ

て。あまさへぬすみ出て。にげなんどせられしほどの事なれば。かたらひしことは。そのころ世に。かくれなかりし事と見ゆるを。後の世ならましかば。いかでさるいたづら事しける人を。后なとには立給はん。今の世には。下々に至るまで。さるみそが事せる女なとをば。あばめにくみて。親もゆるさぬみそか事しける人よ。などいひおとして。大かたは。婦とする人もなかんめるを。まして。天皇命におきてをや。さるをこのころには。さる論もなく。后にたて給へるなんど。今にしては。心得かたき事になん。」

むかし。ひむかしの五條に。おほきさいの宮おはしましける。西の對にすむ人ありけり。

ひむかしの五條とは云々。〇おほきさいの宮とは。このひんかしの五條にましく〳〵ける故。五條の皇大后と申ける也。則文徳實錄。嘉祥三年の所に。詔に曰。皇太夫人。移御東五條院。と見えたる此おほきさいの御事なり。御名を順子とまをし。閑院贈太政大臣冬嗣公の御女にて。仁明天皇の皇后にたゝせ給て。文徳天皇をうみ奉り給ひ。此時の天皇命（清和天皇、）の御爲には。御祖母君になんましく〳〵ける。下に染殿后を。また五條后とも云よし註すれども。五條の后は。順子の御事を申ならへり。又染殿后は。貞觀六年正月七日に。皇太后とまをしたれば。其よりさきの皇太后なれば。まされなく順子にましませり。西の對にすむ人ありけり。西の對は。おほきさいのまします。五條の亭の。西のかたなる對なり。そこに。二條の后のすまはれしなり。そは五條のおほきさいの御爲には。御姪にまします故なるべし。

それをほいにはあらで。心ざし深かりける人。ゆきとふらひけるを。

それをとは。その西の對にすめる人の事也。〇ほいにはあらでとは。心にかなふほどならぬを。ほいにはあらでとは云ふなり。本意の字の心也。穗に出など云ふ。ほにかよはして。註せる人あれど。漢語と皇國語と。混らずべき事にあらず。（以上臆斷、）また古意には。眞名本に。穗にはあらでとあるをとりて。さていはれしは。あらはにはあらでと云事なり。穗は草木などの事のみならず。何にても。あまさへぬすみ出て。にげなんどせられしほどの事なれば。かたらひしことは。そのころ世に。かくれなかりし事と見ゆるを。後の世ならましかば。いかでさるいたづら事しける人を。后なとには立給はん。今の世には。下々に至るまで。さるみそが事せる女なとをば。あばめにくみて。親もゆるさぬみそか事しける人よ。などいひおとして。大かたは。婦とする人もなかんめるを。まして。天皇命におきてをや。さるをこのころには。さる論もなく。后にたて給へるなんど。今にしては。心得かたき事になん。」

むかし。ひむかしの五條に。おほきさいの宮おはしましける。西の對にすむ人ありけり。

ひむかしの五條とは云々。〇おほきさいの宮とは。このひんかしの五條にましく〳〵ける故。五條の皇大后と申ける也。則文徳實錄。嘉祥三年の所に。詔に曰。皇太夫人。移御東五條院。と見えたる此おほきさいの御事なり。御名を順子とまをし。閑院贈太政大臣冬嗣公の御女にて。仁明天皇の皇后にたゝせ給て。文徳天皇をうみ奉り給ひ。此時の

ても。ほにあらはるゝを云り。其は火の氣ののぼり。あらはるゝよりいふ語也。よりてこゝには。あらはならての心にて。眞名本に。かくあるそよき。今本に。ほいにはあらでとあるはわろし。ほいは本意にて。心に思ふ如くなるを。本意にかなふといひ。心の如くならぬを。本意ならぬといへば。此事は。こゝにはかなはぬ言なり。鈴屋翁も。古今集の詞書にも。ほいにはあらでとあるを。おもてはれてゞはなうて。と譯されたる。縣居翁の説を。もちひられたるけなり。然れ共玉かつまにいはれしは。ほいにはあらで。此詞きこえず。眞名本に。穗にはとあるも心ゆかず。ほにはいてずなどそいへ。ほにはあらてなどは。きゝつかぬこちす。なほもじの誤などにや。といはれたれば。定がたく思はれしなり。いづれにても。大かたにはきこゆるやうなれば。已がじゝえらみとりて。猶よき本の出來るをまつべき事也。〇心ざし深かりけるとは。ふかく想をかけたるといふ事なり。〇行とふらひといへるは。たゝに尋たりげにきこゆれども。かたみに深くいひかはして。かよひける。をいふ事なり。

むつきの十日ばかりのほどに。ほかにかくれにけり。

むつきの十日ばかりのほどとは。きこえたるとほり。正月の十日ころといふ事也。〇外にかくれにけり。といひては。其女の。みづからかくれたる如くきこゆれども。さにあらず。しのびにはあれど。かよふ事のしけかれば。世のきこえなどをおもひて。おほぎさいか。たひかさなりてそれしかるべからずとて」御兄がたなどの。ほかへうつして。業平朝臣にあはせじ。とせられしなるべし。（古意に、外にかくれにけりとは、此密事をはゞかりて、男にしられしとするなり、さらずは、外にうつれりといふべし、といはれしは、女のみづからかくれたると思はれしか、こは誤也、）臆斷にいはく。またのとしのむ月に。こそをこひてとあれば。此十日はかりと云。そのやがてさきにかよはれけるなるべし。古今集の詞書には。十日あまりになん。ほかへかくれにけり。とあり。

ありところはきけど。他眞人の行かよふべき所にもあらざりければ。なほうし。と思ひつゝなんありける。ありところはきけどゝは。その女をかくしてある所をば。人にきゝてしりたれどなり。〇人の行かよふべきところならぬとは。大うちなどにや。またさらでも。よのつねの人の。行かよひかたき所なり。古意に云く。人を眞名本に。他の字をかきて。他人の住べからぬ所。といふ事をしらせたり。といはれたる。こはさもあらんか。〇なほ憂しと思ふとは。いたくけさうしける女を。他へかくされたるのみならず。そのかくし所はきゝなからも。人の往來ひかたきところなれば。いよ〳〵うれはしく。かなしかりし月日をふるとなり。なほといふ事いとおもし。臆斷に云く。おもひつゝなん。といへるにて。程をへたる心あり。さればまたのとしとは。次の詞にかけり。といへり。この說いとよろし。

またの年のむつきに。前の梅の花ざかりに。こぞをこひて。かのにしのたいにいきて。立て見居て見みれど。こそにゝるべくもあらず。

また年のは。あくるとしのなり。〇前の梅とは。庭の梅をいふ。大和物語に。ひとりしていかにせましとわひをれば。そよとも前の荻ぞこたふる。とよめる。まへに同じ。さて男の家の庭前の梅をいひて。それにつきて。西の對にも。梅のあるをしらせたり。(以上古意、)さてよのつねの本に。前のといふ事のなきを。今は眞名本によりつ。〇こぞをこひてとは。梅の花のさかりなるに。こぞのころは。かのにしのたいにして。かの女と。はな見てたのしみけるよと。そゞろにこひしく。せめては。そのありし所にだにゆきて。心やらんとて。かの西のたいにいくなり。但し眞名本に。思ひ出てとあれど。こはこひてとあるかた。よろしかるべし。さるはこひてといふよりは。思ひ出ての方。少しこゝろうすく。ことにそれまでは。わすれ居たりしを。梅のさかりにもよふされて。ゆくりなく。思ひ出たるやうにもきこえ。また上に思ひつゝなん。といふにもかさなりて。いかゝなればなり。ことに古今集の詞書にも。こひてとあれば。かたくこひてのかたをとりつ。さてまたよのつねの本には。かのにしのたいにといふ事おちたり。なくてもきこゆれども。あるかたおだやかなれば。眞名本。また古今集の詞書によりて加へつ。(以上、臆斷、)〇立て見居て見とは。下に。とみかう見みけれど。といへる。これにおなじ。たゞめにてみるのみを云にもあらず。事わざに。せんかたなき時のしわざ。立て見たり居て見たりといふ。また立ても居ても。居られぬと云が如し。古今集の詞書に。またのとしの春。梅の花さかりに。月のおもしろかりける夜。こぞをとひてとあり。(以上臆斷、)

うちなきて。あばらなるいたじきにとは。月のかたふくまてふせりて。こぞを思ひ出てよめる。

あばらなるいたじきにとは。人のすまねばいたくあれて。戸さうじたゝみさへもなき所になり〇月のかたふくまてふせりては。下に夜のほの〳〵明るに。とあれば。十五六日の夜なるべしと。臆斷にいへり。こは實にさる說なり。

〇こぞを思ひ出てよめるとは。そゞろに。去年のたのしかりし事の思ひ出られて。この月やあらぬは。かのにしのたいに。といふ事おちたり。なくてもきこゆれども。あるかたおだやかなれば。眞名本。また古今集の詞書によりて加へつ。(以上、臆斷、)〇立て見居て見とは。下に。とみかう見みけれど。といへる。これにおなじ。たゞめにてみるのみを云にもあらず。事わざに。せんかたなき時のしわざ。立て見たり居て見たりといふ。また立ても居ても。居られぬと云が如し。古今集の詞書に。またのとしの春。梅の花さかりに。月のおもしろかりける夜。こぞをとひてとあり。(以上臆斷、)

うちなきて。あばらなるいたじきにとは。月のかたふくまてふせりて。こぞを思ひ出てよめる。

あばらなるいたじきにとは。人のすまねばいたくあれて。戸さうじたゝみさへもなき所になり〇月のかたふくまてふせりては。下に夜のほの〳〵明るに。とあれば。十五六日の夜なるべしと。臆斷にいへり。こは實にさる說なり。

〇こぞを思ひ出てよめるとは。そゞろに。去年のたのしかりし事の思ひ出られて。この月やあらぬの歌をよめるとも也。たゞしこゝなる。こそを思ひ出てと云ふ言は。なくてあらまほし。(眞名本に、こぞをこひてとあるも、)いかにとなれば。梅の花さかりに。こぞを戀てとある戀ては。歌をよみて。歸るまでにかゝりたる詞なるを。こゝにもかくありては。中々につたなきふみ詞なれば也。古今集の詞書にも。こゝにはたゞ。月のかたふくまてふせりてよめる。とそあなる。これよろし。さてこゝの文を。よのつねの本には。梅の花さかりにこぞを思ひ出てよめる。とあるを。眞名本に。梅のさかりに。こぞを思ひ出て、、。月のかたふくまてふせりて。こぞをこひてとあり。縣居の翁。眞名本のかたをとりていはれしは。よのつねの本なるは。亂れて所のたがひたるもの也。眞名本こそ。語の次第も。ことわりもあきらかなる。といはれたれど。思ふにこには。よのつねの本の方よろしかるべし。然るは。こゝの文のいきほひにては。戀てといふよりは。思ひ出てといふかた。少し情うすく。ことに梅の花さかりを見ぬまでは。思ひもかけざ

りしを。花のさかりにもよふされて。ゆくりなく。思ひ出たるやうにもきこえ。また上に。思ひつゝなん。といふにもかさなりて。いかゝなれば也。ことに古今集の詞書にも。こひてとあれば。かたかたよのつねの本によりつ。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ。我身ひとつはもとの身にして。

鈴屋翁の云く。此歌とり〳〵に解たれども。いづれも其意くだ〳〵しくして。一首の趣とほらず。これによりて。今己が思ひ取たる趣をいはんには。まづ二つのやもじは。やはてふ意にて。月も春も。去年にかはらざるよしなり。さて一首の意は。月やは昔の月にあらぬ。月もむかしのまゝ也。春やは昔の春にあらざる。春もむかしのまゝの春なり然るにたど。我身ひとつのみは。本の昔のまゝの身なから。むかしのやうにもあらぬ事よと。よめる也。昔とは。思ふ人に逢見たりしほどなり。本の身といふも。其時のまゝの身といふ事なり。さて身にしてといふは。身ながらの意にて。かくとぢめたる所に。昔のやうにもあらぬ事よ。といふ意をふくめたる物なり。にしてといへる語のいきほひ。上の句に。月も春も。むかしのまゝなるに。といへるとあひ照して。おのづから。ふくめたる意はきこゆるなり。此朝臣の歌。こゝろあまりて詞たらず。といへるは。かゝるを云るなるべし。文に。立て見居て見。見れど。去年に似るべくもあらず。といへるは。此よくめたる意を。あらはしたるもの也。去年にゝぬとは。月春のにぬにはあらず。見る我心ちの。去年に似ぬなり。契沖も縣居大人も。ともに此の歌をとき誤られたり。かの説どもの如くにては。してとゝぢめたる語のいきほひにかなはず。よく〳〵語のいきほひをあぢはひて。心得べき歌ぞかし。新古今集雑上に。清原深養父。「むかし見し春は昔の春ながら。我身ひとつのあらずもあるかな。とよめる歌は。此業平朝臣の歌を。註したるが如し。これにてよくきこえたるものをや。(以上、古今集の遠鏡と、玉かつま、からあゐの巻にいはれしとを、とりあはせて、てこにはあけたるなり、)と云れたるにて。此歌の意。はじめてあきらかなり。また或人の云く。家持集

に。こそ見てし秋の月夜はてらせれど。あひ見しいもはいやとほざかる。此家持の歌にて。大意はよく心得らるゝ也。といへり。

とよみて。夜のほの〳〵あくるに。なく〳〵歸りにけり。

ほの〳〵あくるは。きこえたる如く。夜のあけかたの事なり。その人ゆゑに。所をしたひて。夜ふかくも歸らぬ心。尤あはれなり。(以上臆斷によりて云、)

むかし男ありけり。東の五條わたりに。いとしのびていきけり。みそかなる所なれば。かどよりもえいらで。わらはべのふみあけたる。ついぢのくつれより。かよひけり。

東の五條わたりとは。前條(さきのくだり)。大后の宮のおはし給ふ所をいへり。〇みそかなる所とは。みそかは。ひそかといふに同しく。おもてはれていはなうて。ひそかにしのびて。かよふ所といふ事なり。〇かどよりもえいらでとは。しかしのびて。通ふ所なれば。人の見ん事をおそれて。かど(門)よりはえのりかたければ。童のふみあけたる。ついぢのくつれより。かよへるなり。(頭書云わらわべのふみあけたるとはいへど、かならずしも、童のわざならでも、くづれといふを、文辭にあやをなして、かくいへる也、俗にいふ、犬むぐり、などいふとおなじこと也、)〇ついぢは。築土(つきひぢ)といふ事を。音便にかくいふなり。土もて築たてたる垣にて。(今の俗には、木竹などをもてゆへるをのみ、垣といひなれたれど、ふるくは、土にまれ木竹にまれ、さかひとなしたるをば、すべて垣といへり、)今の世にある。土屏といふものゝ事なり。こは今もある事にて。よくわらわべのふみこはし。また犬なども。ふみあけおく事ある也。さてついぢのくづれたるとあるにつけて。縣居の翁の論はれし説あり。それにつけて。己もまた論あり。そは下にいふべし。

人しげ〳〵もあらねど。たびかさなりければ。あるしきゝつけて。其かよひぢに。夜ごとに人を伏てまもらせければ。彼男。いけどえあはでかへりけり。さてよめる。

人しけくもあらねどゝは。かのついぢのくづれたる所は。大かたも人のゆきゝせぬ所にて。人のし

らぬよしなり。されどたび重りては。おのづからに人もしり。あるじ耳にも入りけると也。臆斷にいはく。六帖に。あふことをあこきか島にひくあみの。たびかさならば人もしらなん。賢木に。いとしのびて。たひかさなりゆけば。けしきみる人にもあるべかめれと云々。といへるか如し。○あるじとは。則ち五條大后をいふか。また下の加筆に。せうとたちの。令守まもらせたまひける。といへるによれば。高子の御兄等をいふか。この以下注に及ばず。きこえたるが如し。○夜ことに人をふせて云々。こを眞名本も。よのつねの本も。人をするゑてとあり。それもきこえたれど。こは縣居翁の。古今集の詞書によりて。伏てと改られたるかた。理たしかなれば。今もそれにしたがひつ。

人しれぬ我かよひ路の關守は。よひ〳〵ことにうちもねなゝん。

歌の意は。人のしらぬ所の。己が通ひみちの關守は。いかでいかで。夜ごとに。しばしなりともねよかし。ねたならば。その間しのんて入らふものを。といへる也。臆斷に。伊勢集に。逢坂の關を

よ。こそもりまされ暮るをなどて我頼むらん。返

しもりませとよるは猶こそたのまるれ。寢るまもあらは越んとおもへば。とよめる。また藤のうらばに。あなかちにから思ふ事ならば。關守のうちもねぬべきけしきに。おもひよはり給ふときゝながら。などいへるを。ひけるが如し。

とよめりければ。いといたう心やみける。あるじゆるしてけり。

心やみけりとは。此歌をきゝて。二條后の。心やましくなけき給ふをみて。順子のあはれみて。またゝ〳〵かよふを。しらぬよしにて。おかせ給ふなるべし。(以上臆斷、)さてまたとよめりければ。とのみにて。おくりたるほどはしるさゞれど。いかなるつてをか頼みて。二條后のもとへ。いひおくられたるなるべし。そはそのときならても。いつにてもあるべし。またもしくは。人かたりきこせまゐらせしか。

「二條の后に。しのびて參りけるを。世のきこえありければ。せうとたちの。まもらせたまひけるとぞ。」

こはまた例の作者の註なり。三條后の御兄人とは。

基經公（則昭宣公の御事なり、）と。大納言國經朝臣となり。以上二段は。清和天皇の御代となりて。まだ御代初の事なるべし。(以上、臆斷によりて云ふ、)○まもらせ給ひける。と御兄たちの。みづからまもり居給へるやうにもあれど。こは人して。令守給へるとの事なるべし。○古意にいはく。せうととは。高子の御兄人たちならば。昭宣公と國經卿なり。此時の權威富貴を極めたる人の。姫君の住せ給ふあたりに。築土の崩れをさておくべきかは。又ゆるしたるあるじを。皇大后としも云にや。又太后を。あるじと申さん家を。荒されん物か。(篤胤云、このあたり文字脫たるべし、文義きこえず、)又后がねなる高子にまさば。ゆるすべきかは。皆あらぬ事なり。古今にても。本より誰ともなき。おとろへ人の家と見ゆ。此文作れる人は。いと心深く。文かく事の上手なるを。さることわりたかへるやうに書ん物か。こは事の意をも得ぬ。後の人の裏書なりけり。さて下の。花の賀。大原野行啓などの時のさまを見るに。彼密事有て。世のとなへの侍るを。此物語にふゝみて作れる條も

侍れと。此條者古今集に。さる衰へ人の家に。かよへるさまに見えたれば。實は誰とも知がたき人なるを。是には詞を加へて。乱たる也けり。といはれたり。篤胤いま是を論はんに。まつ今の世に。權威富貴をきはむる人々の。殊の外に重々しく。そのかまへなとはさらにもいはず。鼠さへも。入る事ならぬまでに。嚴重なるに目なれて。其心もて。當時藤原氏の。權威富貴なりし事を思ふにいかにも古意にいはるゝ如く。その姫君の住せ給ふかまひの築土に。崩などのあるべき心ちせねど。こは今をもて古をはかるにて。いたくたがふ事あり。さるは中昔の書どもによりて。つら〳〵當時のありさまを考ふるに。權威富貴の人といへども。今とくらべ思ふに。こよなく重々しからで。しつそにしてありし也。されば。その住所の園なども。今の如くならざりけん事。おしてもしるべく。しりへの方にて。人のさのみ目にたゝぬ所などには。人かよふ計りの。くつれのなかるべしとも云ふべからず。この頃の事かける書共に。何がしの大との家にありける女に。密にかよひけるなどいふ

ことの多きも。今の世の心もては。さらにそらごとゝさへ思はるゝをや。また后がねなる高子に。皇太后のゆるすべきかは。といはるゝも心得がたし。さるは。古意の趣にては。高子は早くより。后のまうけに。さたまりありし人のやうに思はれしならん。これこそ實によりどころなき説なり。二條后の。業平朝臣と。みそかにかたらはれし事は。またいとわかくて。后がねならぬほどのことなること。三段目の加筆に。たゞ人にておはしける時の事なり。といひ。下の六段に。いとこの女御の御許に。つかうまつるやうにて。居給へりけるほどのことゝいへるにてしるし。されば后に立給へるは。業平朝臣とのかたらひをば。御兄人かたなどの。いさめ給ひて後の事なるべし。下の花の賀。大原野行啓の段などの時のさまを見るに。かの密事故。世のとなへのありけるさまに。ふゝみて作れるなどまでは。心つかれたれど。今少しこまやかに考へて。此條などは。實に業平朝臣の自記なる事を。さとられざりしは。いかにぞや。むかしをとこありけり。女のえうまじかりけるを。年をへてよばひわたりけるを。

えうまじかりけるは。得得がたかりしにて。上の得は。今の俗にも。得かゝぬ。え行かぬなどいふ得なり。〇年を經てよばひわたりけるとは。としひさしくかよひける。といふ事也。(古意に、得かたき女を、年歴ていかでと、うかゞひありきたるに、やうやうにして、とやうにいはれたるは、説過られしなり、)〇よばひとは。いと〳〵上つ世より。女にかよふことを。しかいへり。すなはち萬葉集に。夜這と書き。結婚とかけり。竹取物語に。夜はやすきいもねず。やみの夜にも。穴をくゞり。かいまみまどひあへり。かゝるときよりなん。よばひとはいひける。源氏の玉かつらに。けさう人は。よにかくれたるをこそ。よばひとはいひけれ。などいひ。また枕草子に。夜ばひ星ともいへり。(以上、臆斷、古意に依て、いさゝか己が心をも加ふ、〇さてこゝのつねの本にはかくあるを。眞名本には。上に女の。といふ詞なくて。えうまじかりける人を。とあれど。こは常の本のかた。よろしければ。今はそれによりつ。然るを古意には。かれもこれもとりて。をとこありけり。女のえうまじかりけるを。

かりける人を。とせられたるは。言かさなりて。なか〳〵につたなかるをも。かへり見られさる非説なり。

からうじて。女心合而ゝ居て往ゝぬすみ出て。いとくらきにきにけり。あくた川といふ川を居ていきければ。

からうじてとは。辛俗にやう〳〵の事して。といふとおなじ。〇ぬすみ出て。いとくらきに來にけりとは。人めをしのびて。その夜のくらきをさいはひに。つれて出たるなり。いてゆく事を來といふ事。古書どもに多く見えたり。〇あくた川は。延喜式に。攝津國島下郡に。阿久刀神社あり。此所の河を云つらん。(以上古意、)〇居ては。率の字將の字などをよみて。則つれて往たるとの事也。〇さて又眞名本に。からうじての下に。女心合而とあれど。かくては文詞。なか〳〵につたなし。年久しく。よばひわたれる女とあれば。つれて出たるは。心あはせてなる事。更に云までもなし。こは今本に無きぞよろしき。またくらきに來にけりを。くらきに居て往けりとあるも。今本の方まされり。こは文詞のすぢを。よく味ひてしるべし。然るを古意には。かにかくに。眞名本をのみとられたるは。いかに思ひあやまられけるにか。

草の上に置たりける露を。かれはなにぞ。白玉か。となんをとこにとひけるを。

露をとへる事は。文にいとくらき夜とはあれど。うすおぼろに。露のひかりの見えければにぞあらん。臆斷に。かゝる道をならひ給はねば。露をもとひ給へるにや。といへる。ことさもあるべし。然るを古意に。いかなる人か。露をしらざらん。闇に露は見えさるを。かく書るは。いとも里はなれたる川べを。やみの夜ふかきに行が。いとゝものおそろしきに。雷のひかりの。をちこちの露にきらめくを。鬼の目などの。にらまへるさまにおぼえて。問こゝろなり。はた次の事をいはんもとなり。といはれたる。此説おもしろくはあれど。少しうかち過たる説なり。さるは。こはいまだ。雷のなりいてざるほどの事にて。次にそのすさましきさまをいふとて。こゝをばとひけるをと。まづいひとちめたる文章のあやなり。また上田秋成が。よ

しやあしやには問けるをの下に。何とか詞章の。二句計り脱たるならん。かくては文章とゝのはずおぼゆ。とゞへるも。こゝの文章を。うまく考へさるによりてなり。さてとひけるをのをもじ。今本になきを。眞名本に依て加へつ。熟く文辭を味ひて。このをもじなくては。えあらぬ事をさとるべし。また白玉かの三字は。歌に依て。いま己がはじめて加へたるなり。こはこの言ばなくては。歌とかけあはぬ心ちのすればなり。もとも古き歌集の。辭書などの例を思ふに。歌にいへる事は。はし詞にははふきて書るなどもあれど。こゝはさる類ともたがへばなり。されどこは己が心のおもむくかたなり。人をしひるにはあらずなん。

○露をなにぞととへる事は。臆斷に。かゝる道をならひ給はねば。露をもとひ給へるにや。といへり。（頭書云この處重複）然るを古意に。破りていはれしは。いかなる人か。露をしらざらん。闇に露は見えざるを。かく書るは。いとも里はなれたる川べを。やみの夜ふかきに行が。いとゝものおそろしきに。雷のひかりの。をちこちの露にきらめくを。物の目などの。にらまへるさまにおぼえて。問ふ心なり。はた次のことをいはんもとなり。といはれたる。此說おもしろくはあれど。すこしうがち過たる說なり。こは上田秋成か。よしやあしやにいへるは。草の上におきたりける露を。是は何ぞと問までは。神なり雨降ともいはず。歌にしら玉か何ぞととひし。と讀るを合せて。草葉の露を。玉かととひし文ならずや。かつ神なり雨もいたくふらば。草葉に露は堪まじく。さるおそろしさには。たをやめやがてそこにても。魂消んものぞ。さらばこは。何ぞとは。小夜の道しば。分ならはぬ心に。かばかりおき亂りたる露原を。ともせる松明。或は闇の雲間の。星の光などに。玉ぬきみだしたる如くも。そらめして問ん者。なまざかしき女心。と見ばいかに。といへるぞよろしき。こは誠に。いまだ雷なり。雨もふり出ざるほどのことにて。こはかたみに。情ふかく思ひかはしたる男女の。常は人目をしのひ。心の如くもあらざりしを。かくほいとげて。つれ出て。人をはゞかる事もなく。語ひつゝたのしかる心に。たはふれて。露を玉か。などは問けるなるべし。なほ歌の所に云るを合せ見て。然る事をしるべし。さて次に。やがてすさまじくあれ出て。あまさへに。女を鬼にくはれたるさまをいはんとて。こゝをばまづとひけるを。とゝちめて。後をふくめたる文章なり。（秋成が說に、問けるをの下に、何とか詞章の二句計り脱たるならん、かくては文章とゝのはずおぼゆ、と云るは、文詞の章を、よく考へざるにて、こは誤なり、）〇さてとひけるをのをもじ。今本に脱たるを。今は眞名本に依て加へつ。さるはこのをもじ。こゝには千引石の。おもく力ありて。かくたのしかりしを。やがてすさまじくあれ出て。あまさへその女をさへに。鬼にくはれたる。いみじきかなしさを云んとて。かくいひ置て。次をふくめたる文章なり。よく〳〵文詞を味ひよみて。このをもじの。力ある事をさとるべし。

ゆくさきおほく。夜もふけにければ。

ゆくさきおほくは。心ざして行かたの。道のとほきなり。則眞名本には。行前遠くとぞあなる。（また思ふに、この物語しるしけんほどは、やゝ假字もみだれたるほとなれば、とほくとかけるとを、をとまがへて、つひにおほくとなれるか、とも思へど、こは今の俗にも、行先のたんとあるなどいふ事あれば、おほくにてもさまたげなし、）然るを古意に。今本に。行さきおほくとあるは誤也。かかる時に。心あてゝ。行さきの多きは。よくもこそあれ。眞名本に。遠くと有ぞことわりなる。と云れたるなどは。甚じき非說なり。

鬼ある處ともしらで。神さへいといみじうなり。あめもいたく降ければ。

この鬼ある處ともしらでは。あばらなるくらといふへ。つゞけて心得べし。（鬼とは、今の俗にも、ふにになど書なる、二つの角生て、とらの皮をとうさきとしたるものを、青鬼、赤鬼などいふ類のものなるべし、古意に。今の童等のおそるゝ、ばけものゝ事にて、物語ふみに云、みな是なりと云しは、少したかひてきこゆ、）〇いみじうは。甚しく嚴しくなどいはんが如し。（古意、）時といひ處といひ。物すさまじきさまなり。清少納言にかきくらし雨降て神もおどろ〳〵しうなりたれば物もおぼ

えずたゞおろしにおろす（臆斷）

あばらなるくらに。女をば。おくにおしいれて。をとこ○弓やなぐひをおひて。戸ぐちにをり。

いにしへの卿には。公の稻を納めおく倉。必あり。それが今は稻を出しては。内むなしく戸をも放ちて。あばらにて有を。さいはひに見つけて。女を奥におし入て。我は戸口に用意しつゝ居て。夜の明るをまつさまなり。かゝる倉は。火をさけて。郷はなれたる河べなどにかまへてあるが。稻を出して。守人なき後は。貍めく物のすめるなめり。是をことに田舍の有さまにて。こゝにかなへり。さるを倉にあらず。座也といふ説もあるは。いかにぞや。戸口とさへいへるをや。今の世にも。田舍には。さる倉のあるを。いにしへ稻かりて。倉につみおくには。彌里廻には多かりけん。（古意、）○弓胡籙を。（やなぐひといふは、矢をもりて、背に負ふ器なり、）負ふとは。中頃の世には。仕ふる人は元よりにて。直人も。遠く行にも。夜行などする時にも。是を負たること。今昔物語などに。いと多く見ゆるなり。そのうへ。かく女を偸て行には。いかなる男も。弓矢刀など負はぬ人やはある。こは時世の有樣に。かなへるのみならず。この文の勢ひを。得たる物なり。律令の行はれし世々には。私に兵器をたくはふることは。違令也しを。今昔物語の比にて。世の下りたるさまを見るに。延喜などの前より。制令おとろへて。諸國に私の勢をなし。盜人も多ければ。都の内にてすら。何人も。弓矢なぐひを負て。夜はありくことゝなれり。（古意、）さて弓胡籙をおふと云るにつけて。業平朝臣。此時近衞月なれば。といふ説のあれども。用へからず。作れる事なれば。たゞそのまゝに見るべし。もしきびしくいはゞ。貞觀六年三月に。左兵衞佐より。左近衞權少將に遷らる。此段の末に。いとこの女御の御許に。つかふまつるやうにて。と書たれば。染殿后の。女御にてをはしけんほど。二條后は。童女にてをはすべければ。あはぬ事なり。こは竹取物語に。此まもる人人も。弓箭をたひして。おもやのうちは。女ども。はんにをりてまもらす。女ぬりこめのうちに。かくや姫をいたかへてをり。おきなもぬりこめの戸をさして。戸口にをる云々。源氏（繪合）に。まつ物語のいてきたる。はじめのおやなる。竹取の翁に。うつぼのとしかげをあはせてあらそふ。とあれば。こゝは竹取をまなびて。書るなるべし。あばらなるくらは。（竹取に）ぬりごめのうちに。と云る心に同じ。（臆斷）

はや夜もあけなむず。と思ひつゝ居たりけるに。

臆斷に云く。○頭書云こゝはおく斷のこらず寫すべし

さて眞名本に。明何爲與とあるにつきて。古意には。それよろしと云れたれど。こは今本の方まされり。

鬼はや一口にくひてけり。あなやといひけれど。神なるさはぎに。えきかざりけり。やう〳〵夜も明行に見れば。居てこし女もなし。あしずりしてなけどもかひなし。

あなやは。女の。鬼にくはるゝときの詞なり。古語拾遺云。古語。事之甚切。皆稱二阿那一。とありて。こゝは女の鬼にくはるゝとき。一こゑあつとさけびたるをいふなり。（以上、臆斷に依て、いさか己が心をも加ふ、古意同じ、）○神なるさはぎに。えきかざりけりとは。女の。ひとこゑ。あつとさけぶこゑをばきゝたれど。雨ふり神のなりはたゝく音にまぎれて。喰れたる事をば。しらで有しとなり。○やう〳〵といへるは。はや夜も明なんと思ひつゝ居たる。といふ首尾なり。○あしずりは。文選に云く。子どものやう也。（以上臆斷、）こは今も子どもなどの。いたくなきいさちては。兩の足をさし出し。うちくろぶしをすりあはせても。なく事これなり。さてそのかなしかりし心を。則歌によみ出たるなり。

新古今哀傷在原業平「しら玉か何ぞと人のとひし時。露とこたへて消なましものを。

こは女を鬼にくはれたるかなしさ。やるかたなく。よひの間の。いまだあれいでざりし程の。たのしかりし事の思ひ出られ。そを歌にはよめる也。一首の意は。よひのほどかたみに。いとおもしろくかたらひて。かの人の戲さへ云て。露を白玉か。なにぞなど問しほどは。いと〳〵たのしく。心ゆきて。今かゝるうきめを見んなどは。思ひもよら

ざりしを。これを思へば。かの露を。玉かなにぞと問し時。露と答へて。其露の如く。すぐに消たらんには。今かゝる悲みはせざらましを。其時しなざるからに。今かゝる憂目を見る事よ。となけきたる也。なほ深き哀もこもれる歌なるを。情はあまりあれど。かきとりかねつ。臆斷にいはく。元眞集に。

しら玉か露かとゝはん人もがな。物思ふ袖をさしてこたへん。」是はこの歌をとりてよめり。

「これは二條后の。いとこの女御の御もとに。つかうまつるやうにて居たまへりけるを。

これまた例の後人の。書入れたるなり。いとこの女御とは。染殿后の御事なり。二條后は。贈太政大臣長良公の御女。染殿后は。忠仁公の御女なる故に。いとこなり。(臆斷に依ていふ、)〇つかふまつるやうにてとは。まさしく仕へ給ふにはあらで。今の世に。へや子。なと云やうなる事なるべし。かたちのめでたくおはしければ。ぬすみて。おひて出たりけるを。御せうと。ほり河のおとゞ。たらう國經の大納言。また下らうにて。うちへまゐり給ふ道に。いみじうなく人あるをきゝつけて。とゞめて。とりかへし給ふたけり。それをかく鬼とはいふなりけり。

かたちのめでたきとは。御容貌(かたち)のうるはしき。といふ事なり。遊仙窟に。可愛をめでたしとよめり。

(臆斷に依て云、)〇堀河のおとゞ(大臣)は。昭宣公なり。ほり河の□□にすみ給へる故。ほり河の大臣と云るなり。官位高ければ。弟なれどもさきに書り。國經卿は。後に書ても。兄なれば。太郎とかけり。

(以上、臆斷に依て、いさゝか己が心をも加ふ、〇さてこゝを眞名本には、堀河大將、太郎基經、國經大納言とあり、古意に、是を取て云れしは、大將太郎と有は、草書に、太政大臣と有しを誤て、其下に、基經の二字は、小書にて書べき例なるを誤れり、かやうの高位の人は、かゝる物には、はゞかりて、名は本文には書まじき例をも知らぬものゝ、大事(書カ)にせる也とて、ほり河の太政大臣基經、國經の大納言、と書改られたり、これも然る事ながら今はしばらく、今本によりつ、こは人々の好みに從ふべし、)〇末下臈にてとは。奉公の年

臈少くて。また賤官なるをいふ。(古意)〇うちへまゐり給ふとは。則參內し給ふ途中(みち)になり。今本道の字おちたり。古意に。眞名本に依て。補はれたるぞよき。〇いみじくなく人の在けるをきゝてとは。あばらなるくらの內に。后の居給ひて。あめふり。かみのいみじくなりはためくに。えたへず聲たてゝなき給へる。との事なり。〇とゞめてとりかへすとは。業平朝臣の戸口に。夜のあくるを待てをりける間に。あばらなるくらなれば。何方よりも入りて。とりかへし。つれかへり給ふなり。〇それをかく鬼とは云なりとは。あからさまに御兄人等の爲に。取かへされたるとはしるしかたき故。かく鬼とはかこつけいへるなり。との意なり。

またいとわかくて。后のたゞにおはしける節の事とか哉。

こはきこえたるが如し。今本。ときの事なりとあれど。こは後の人のうら書なれば。眞名本に。事とかや。と有を取つ。

081"N4"
Hi 68
2

明治四十四年六月十五日印刷
明治四十四年六月二十日發行

著作權所有
許可濫刻複製

定價金貳圓也

編輯者　室松岩雄
發行者　東京市麹町區飯田町五丁目八番地　三里半七
印刷者　東京市神田區松下町七、八番地　橫田五十吉
印刷所　東京市神田區松下町七、八番地　橫田活版所
製本者　東京市京橋區南鍋町二丁目七番地　由美直之助

發行所　東京市麹町區飯田町五丁目八番地　一致堂書店